

資料渉猟余話

その112

松下壽男さんを通じて、長三郎さんと一緒に持ち山の手入をされている長三郎さんの息子で平岡郵便局に勤務する健司さんが協力してくれ

ることになり、鎌倉さんと一緒に4人で駄目元でも行ってみようということになった。当日朝急遽、高森町の民俗学研究家の橋都正さんも加

を嘸みそうな作業道を無理やり登り、小林家持ち山まで登る。その軽トラも捨て、山仕事の運搬機に荷物を移し替え、徒歩で方向への根通

山上の神殿、その後の調査中

嶋 不 濁

り(木曾義仲の腰掛石へ通じる道)を長

三郎さんの作業する金山様まで作業道をたどった。

金山様にお詣りを済ませ、長三郎さん

の話をつかがう。尋常高等科2年卒業後、羽田空港近くの徴用工場で働き、戦後18歳頃帰省して、昭和30年頃には復興の材木を山から切り

出す作業に従事した。材が切り出され裸になった山は三六

災で崩落などの被害を受けた。小林さんは、罪滅ぼしのよう

に植林を続け、昭和

57年に今の山を入り、山の手入れをしてきたのだという。金山様にお神酒を供えながら、私たちが探している宮之本神社らしきものを最後に見たのは、もう40年も前のこと、その時は以前あって

宿泊煮炊きもできた「別荘」も朽ち果てていたという。金山様から等高線

ぶたいに作業道の踏み跡を西にたどる。小林家の持ち山を越えたときに踏み跡が怪しくなり、ガレ



右奥に「斎田」の立札が見える 昭和14年頃



奥の院にお神酒を供える小林長三郎翁

(つづく)